

# 第2話 源氏の勃興

けれども、藤原氏がわが儘な政治をしている間に、新たに地方に興った武士の力は、既に非常に強くなっていた。とりわけ源氏の勢力は東国に盛んでした。

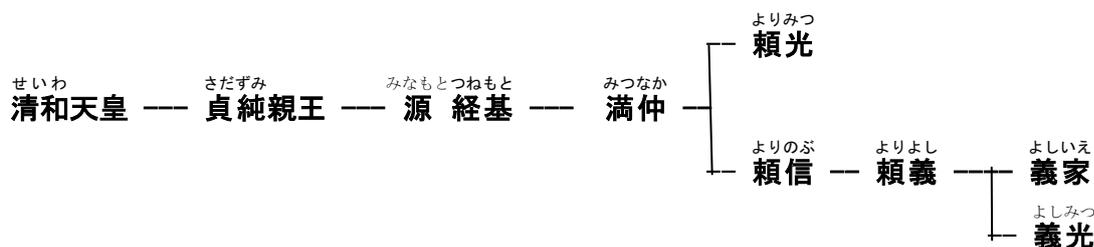
ところで、話は少し前に戻りますが、――藤原氏がわが儘な政治をしている間に、地方に深く根を張った武士の力は、此のころにはもう如何とも出来ないほどに強くなっていた。彼らは到る処で互いに武力を競っていました。

これらの武士の中で、最も名高く、勢力のあったのは源氏と平氏です。どちらも元は皇族で、平氏は桓武天皇から出て、源氏は清和天皇から出ました。

## 東国の平氏

平氏の先祖は、桓武天皇の曾孫にあたる高望王です。王がはじめて朝廷から平の姓を頂戴して臣下となり、上総介という役人となって東国に下ったので、子孫は多くその地方に住んで勢力を広げていました。第61代朱雀天皇の御代に、高望の孫の将門が乱を起こして誅せられたために、平氏の勢いは一族としては一時衰えかけた。が、一方、将門を誅した一人が彼の従兄弟の貞盛でしたので、この一門だけはつづいて東国にはびこって、後に大いに繁昌する基を開いた。

この将門が謀反を企てた時に、真先にこれを朝廷に訴えたのが武蔵介経基でした。清和天皇の第六の皇子貞純親王の御子なので、世に六孫王経基と呼ばれた。この経基が第62代村上天皇の御代に源の姓を賜って源氏の先祖となったのです。



## 満仲と頼光

経基の子の満仲も、その頃の無双の武人として深く藤原氏に信頼されて、重く朝廷に用いられた。諸国の国司も歴任すれば、左馬権頭、治部大輔などという官にも進み、また鎮守府将軍にも任ぜられた。摂津の国守として任に在った時に、其の国の多田郡に広大な荘園を開いて、永くそこを根拠地としたので、多田満仲とも呼ばれる。

満仲の子の頼光もまた諸国の国司となってよく地方を治め、朝廷の役人としても評判がよかった。殊にその武勇は、四天王として知られた渡邊綱、坂田金時、碓氷貞光、卜部季武という四人の家来の驍名

## 第2話 源氏の勃興

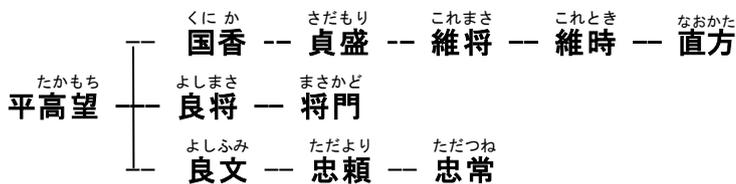
と共に世に聞こえている。稀代の強盗鬼同丸を鞍馬路の市原野で打取った話や、大江山の山賊酒頭童子を征伐した話などは、よくお伽噺などにもなっています。

しかし、源氏が武門の棟梁として大いに世に聞こえるようになったのは、頼光の弟の頼信が、平忠常の乱を平らげて東国に威名を振るい、発展の根柢を其の地方に得た時からです。

### 平忠常の乱

平忠常は高望の曾孫で、将門や貞盛の従兄弟の子です。下総に住んでいた武士で、前に上総介に任せられたが、勢いに任せて次第に横暴になり、上総、下総の地をばまるで自分の物かのように振舞って、朝廷に納めるべき租税を途中で横取りしたり、天下の公事に使うべき人夫を自家の勝手な事に使ったりした。

ついに第68代後一條天皇の長元元年には兵を起こして、上総の国府を陥れ、安房に攻め入って其の国司を殺した。



そこで、朝廷では、貞盛の曾孫に當る檢非違使平直方らに命じて、東海東山二道の兵を發してこれを討たしめたが、忠常の勢いが盛んで、迎も勝てそうな見込みがつかない。時々攻め寄せて行っても、いつもきまって撃退されて、損害は官軍のほうが多かった。ついには、極めて稀に小競り合いをして見るばかりで、はかばかしい戦争さえもしなかった。

こうして、空しく一年経ち、二年経つと、忠常はいよいよ朝廷を侮って暴威を近隣に振るったので、新たに安房守となって赴任して来た藤原光業などは、一日も役所に落ちついていることが出来ずに京都に逃げ帰るといふ有様でした。

### 忠常、頼信に降る

終に朝廷では平直方らを召還して、更に甲斐守源頼信に命じて追討させた。その頃、忠常の威勢は既に完全に総房三州を圧して、大河に臨んで築いた下総の城には、有り余るほどの兵糧が蓄えられていました。

頼信は追討軍を率いて常陸に入り、其の城の対岸まで難なく進んだが、前には10余町に及ぶ大河が漫々と流れている。附近の渡船は悉く忠常のために引き上げられてしまっていて、渡ることが出来ない。陸路を引き返して迂回すれば七八日かかるであろう。そうしては更に忠常の備えを固くさせるばかりです。どうでもこれはここを突破しなければならないと頼信は思った。

彼は部下の軍勢に向かって、「この河には一條の浅瀬があるということをわしは聞いている。誰か渡って見る者はないか？」といった。遥かに後ろの陣から眞髪高父という者が進み出ました。浅瀬

## 第2話 源氏の勃興

を知っているという。瀬踏みをさせて見ると、巾一丈（約3m）ばかりの間で、深さは馬の腹ぐら  
いにしかとどかないところがある。そこで、頼信の軍勢は容易に流れを乱して渡って、俄かに忠常の城  
の前に現われました。

さすがの忠常も、よもやこの大河を、一艘の船もないのに数千の兵が渡って来ようとは思っていなか  
ったので、全く油断して防戦の手筈を怠っていた。彼は一戦にも及ばずして降参を申し出た。他の  
人々が三年もかかって勝てなかった忠常を、頼信は唯一度で、而も戦いもせず降参させたのです。其  
智、其勇、其勢いが、余程秀でていたに違いありません。

### 東国の平氏が源氏の家臣となる

頼信は忠常以下を捕虜として京都に凱旋したが、その途中で、忠常は病気に罹って死んだために、京  
都へはその首だけを持って帰った。しかし朝廷では、すでに心を改めて降参したものであるからと言っ  
て、深く其の罪は咎めず、専ら頼信の功を厚く賞した上に、忠常の従兵を悉く頼信の家臣とすること  
を許された。

そこで、これまで平氏の根拠地であった関東地方は、全く源氏の勢力の下に風靡されてしまったので、  
東国に蔓っていた平氏の多くは、進んで源氏の家臣となって、その庇護の下に自家の安全は計りました。  
これが、源氏の勢力が後に大いに東国に盛んになった源です。

（第2話 源氏の勃興 終わり。次は前頁に戻り、第3話 前九年の役へ）